福岡
福祉活動専門員の
まなこ
社協活動前進のために
No.39　1996年２月発行　福岡県専門員連絡会　まなこ編集委員会　印刷　コロニー印刷

雄琴温泉 体験レポート！

じゃなくって、第3回全国社協職員のつどい参加報告

稲築町社協　木山　淳一

一月十三日、十四日の両日、「出会おう、ふれあおう、わかちあおう」～つくろう、ウチらのライフライン～をテーマに、北は福島県から、南は熊本県までの社協職員二二〇余人の参加のもと、第三回全国社協職員のつどいが、雪まだ残る琵琶湖のほとり雄琴温泉で開催された。

私は、せっかくの連休を返上し、「自分だけ温泉なんていいね」の家族の言葉を背中に、専門員連絡会の経費を使う責任上、報告レポートを書かなくてはならないというありがたい条件付きで、参加させていただいた。

女子大生との相席もつかの間

博多九時発東京行ひかり三六号は、連休のせいか指定席は満席。仕方なく、自由席に座るべく三十分前から並ぶことにきめ、寒風が吹き荒ぶプラットホームに缶ビールを片手に立った。

その努力の甲斐あって、無事座席を確保。隣は、と見ると女子大生風のギャル。これまた、超ラッキーである。

「これは、春から縁起がいいや！」とビールで喉を潤した。その幸せも束の間、徳山から歳のころなら八十四～五歳、腰が九十度に曲がったご婦人が乗車してきた。

悪い予想ほど当たるもの。私と女子大生の座席の横にすがるように立つそのご婦人。状況は、どちらが席を譲るか、それとも死んだ振りをするかである。

女子大生は、なにやら一生懸命お手紙をかいておられ、いっこうに立つ気配なし。

私も、せっかく苦労して確保した座席をそう簡単には譲りたくない。ましてや京都までは、まだまだたっぷりとある。「えーい、死んだ振りだ」、「いやいや、福祉労働者たる者、お年寄りに席を譲るべきだ。」葛藤は続く。

「よしこうなったら、次の駅で降りられることを期待して席を譲ろう。お年寄りの事だ、そんなに長旅はしないだろう。」、そう決心して席をたつ。

「どうぞ、こちらの席にお座りください」。

少々遠慮はされたが、ご着席。

さぁ、本題である。「どちらまでお出掛けですか」。期待に満ちた私の声。だが奇跡は二度起こらず、不幸は二度続

く、「東京までです」。

ハイ、そのそれまでよ、である。こうして京都までの長ーい旅は始まった。

京都駅から湖西線に乗換え約二十分。憧れの雄琴温泉駅到着。頭の中は、男性週刊誌で見たあのグラビアが駆け巡る。ところが、駅は小さく、周りはというと、住宅地の造成中らしくそれらしき建物は、なにもない。客待ちするタクシーもなく、待ち受けていたホテルの送迎バスに乗り込む。これからが、憧れの光景かと思うまもなく、会場である琵琶湖グランドホテルに。琵琶湖が眺められ、期待の建物はなく、静かで、本当に研修には最適の場所であった。

これからが正念場　未だ厳しい震災後の状況

まず初めに、開会行事と兵庫県から震災後のいまだ厳しい市民の生活や社協の現状が報告された。

テレビや新聞では着々と進む復興の様子だけが伝えられるが、四百人を越す人々が、未だテント生活を強いられており、また、四万七千戸ある仮説住宅では、高齢化率が、三二・五％、そのうちに占める一人暮らしの方の比率が、一九・九％と非常に高い数値になっている。しかもこの状況は、今後ますます進展することが予想されるらしい。

このような状況下で、日々活動する社協職員は、自らも被災者としてのストレスと厳しい財政、労働条件などで体調を崩す人が多く、人と資金の不足が大きな課題となっているようだ。一周年を迎えたいま、「これからが正念場だ」という報告を聞き、すっかり、過去の出来事として、また他人ごととなってしまっている自分を恥じた。

個別援助ネットワークができなければ　小地域福祉活動じゃないの？

一日目の中心は、九つに別れての分科会だが、私は、その第七分科会「小地域ネットワークについて」というテーマの分科会に参加した。

今日的なテーマのせいか、三十三人構成の最も大きいものとなった。

寝屋川市社協職員の方からの「市社協職員から見た小地域福祉活動の課題」と題した問題提起を受けて、AからFまでの六グループに別れ、小地域ネットワークの目的と活動をKJ法で討議した。KJ法という慣れない討議方法に少しばかり肩の凝りを覚えたが、大変勉強になる進め方であった。

私の所属するD班は、調布市、奈良市、福井市の三人の女性と千葉市の男性との五人で、小地域福祉活動は、福祉コミュニティづくりを目的にするもので、そのための活動として人と人との関係づくりや福祉ニーズの把握と住民の主体的な解決活動などがある、といったようなことを話し合った。また、いま流行の「個別援助ネットワーク」は、それ自体を目的とするのではなく、あくまでも小地域福祉活動の一部であるといったことを確認した。

他グループからの報告も、まとめ方や表現に差異はあるもののおおよそ同じような結果であったように思う。

二時間三十分の時間が大変短く感じられ、研修としては久々に充実した時間を過ごすことができた。

他の分科会については、報告することができないが、各分科会に参加した方の感想を参考までに掲載するので、推察していただければと思う。

第一分科会　二十代の分科会

いろんな人の話を聞けたし、私の日頃思っていることと同じことを思っている人がいて、嬉しかったし、自分の意見も（少し）言えたので、充実した時間でした。

仕事内容の話はのとのち身につけていくとして、それ以前の人間関係とか連携の大事さがやっぱり印象に残りました。（兵庫県）

第二分科会　職場で自分の想いが語り合えますか？

文化かい参加者の方々と同じ悩みを持っていることを知し、ちょっと安心しました。

皆、意欲的な発言をされており、「自分も積極的にならなければ」と思いました。

この分科会で少し、リフレッシュできそうな気がしています。（愛知県）

第三分科会　私ももっと育ちたい、そのためには…

「箱庭づくり」と言う事でこの分科会に参加させていただきました。でもそうではなく少し残念でした。

でも心理テストも大変楽しくやらせていただき、有意義でした。

全体的に自己紹介があればよかったのにと思いました。（滋賀県）

第四分科会　語ろう！社協への夢・希望　そして未来

土と風―楽しかった。あしたは、風になりたい。福祉は人なり―を実感しています。社協もすてたもんやないナすごい人材あるやん！！（滋賀県）

第五分科会　農・漁・山村での在宅福祉を考える

大変な田舎の我が町ですが、これから頑張る力がわきました。（奈良県）

第六分科会　在宅福祉の「質」の向上について

地域によって、在宅福祉サービスのとらえ方が違うのがわかりました。

これから先の課題、自分の中で注意すべき点があったと思います。（奈良県）

第七分科会　小地域ネットワークについて

「小地域福祉活動」についての討議は久しぶりだったように思います。

ハウツーでの検討が多くなってきた中で、コミュニティに対する福祉をあらためて意見交換ができたと思います。（？）

第八分科会　社協ワーカーのこだわり

現状追認するのはやめて、愚直なほどに本質論にこだわることの必要を感

じました。(目の前の課題はその本質の中で考えましょう)(?)

第九分科会　委託事業と行政の関係

委託については、みんなそれぞれ何か想いをもっている。なかなかまとまらないけど明日もみんなで言いたいことを云いましょう。(神戸市)

いろんな人がおるぞ　盛り上がった名刺交換

分科会終了後、交流会、二次会と相成った。

その席上、熊本からの女性出席者とお会いしたが、自費での参加とのこと。「井の中の蛙になりたくないから」という彼女の参加動機に、自分の存在場所が井であることすら無自覚な私は、ただただ頭が下がる思いだった。

また、地域がら「ソープランド」に話が及んだのだが、障害を持つ人が利用できる店を当番制で決めているらしく、当番の店では入店拒否はなく、たとえ全介助でも利用できるとのこと。まさに特殊入浴サービスである。

強いて言えば、当番など決めること無く、好きなときに、好きな店に行ければと、話したことであったが、女性問題の運動家の方々からは、「ソープランド」の存在を認めることで大層お叱りやひんしゅくを買うかもしてないが、障害を持つ人やお年寄りの性の問題が目を逸らしている現実にあっては、必要悪ではないかと私は感じた。

二次会では、大学時代に上野英信や土門拳を読み筑豊や炭鉱に興味を持ち、田川や直方、あるいは高島など旅をしたという若者と出会い、意気投合してしまい、いつものごとく二日酔いパターンであった。

蛇足ながら、落語の宣伝もしてきたので、仕事がくるといいなー。

あなたが望むからネットを　組むのです

二日目は、早朝(私にとっては)九時より、昨日からの分科会。

福山市社協の藤井悟氏の「福山市社協の小地域福祉活動と小地域ネットワーク」と題した総括事例発表がなされ、個別ネットワークを組むときに、福祉専門職がおかしがちな対象者の人格を無視した押し付けや、自立心を損なうような過剰な援助などが指摘された。

また、ネットを組む際、「あながた望むからネットを組むのです」という対象者との共通理解を持つことが必要であり、ネットワーク活動は、非常に息の長い活動だとの話があった。

教育とは根を張る教育であって　芽を伸ばす教育ではない

分科会終了後、全体会へと席を戻し、近江学園で糸賀一雄氏と活動を共にされた三浦了氏の講演、「滋賀の障害者福祉の歴史と現状」～糸賀一雄氏から学ぶ～が行われた。氏の関わりの中からの糸賀氏の人となりを、その昔、社協に入ったばかりの頃、書店でみつけた「福祉の思想」を買って読んだことを思い出しながらうかがった。

この公園の中で、「教育とは、根を張る教育であって、芽を伸ばすものではない。」という言葉が印象にのこった。

今の教育は、芽を伸ばすどころか伸びようとする芽さえ摘み取ること、芽を揃えることに躍起な「選定教育」ではないだろうか。

教育だけでなく社協活動も打ち上げ花火的な事業で伸びた芽を行政に、あるいは一部の住民にアピールしているにすぎないのかもしれない。根気強く土にしっかりと根を張る活動、言い換えれば、「目に見える社協」ではないけれど、悩みや課題を抱える住民の一人一人と向き合った地道な活動を続けることこそが、本当の社協生き残りの道かもしれない。そんな事を考えていた。

全国に広げよう　自主研究会の輪を

昼食をはさみ、「社協職員自主研究会の意義と役割」をテーマに、パネルディスカッションが行われ、静岡県、大阪府、兵庫県での取り組みが発表された。

県社協主催の研修会や研究会では、自由な議論ができなかったり、あるいは自主性に欠けると言う事から、自分たちで月に一度や二か月に一度といった具合に、研究会を開いているとのこと。三者に共通しているのが、その会に参加することによって、「明日からの仕事のエネルギーになる」、「視野が広がる」などがある。また同様に参加者が少居、メンバーが固定化してくるなどの悩みも共通しているようだ。

いずれにしても、福岡県専門員連絡会の形骸化が危惧される現状と照らし合わせながら、フロアーからも報告されるその他の地区での取り組みを羨ましさを感じながらきいていた。

二日間を通して感じたのは、企画への心配りのきめ細かさである。

たとえば、昼食時に各分科会の報告をビデオに編集して流したり、二～三時間おきに発行される「たぬき」というミニニュース紙など、徹夜の作業を敢行してのご苦労は、主催した関西社協コミュニティワーカー協会並びに実行委員会の結束力こそ成せるものだろう。

自主性を欠いた今回の参加ではあったが、最近に無く元気をいただいた研修に、帰路につく頃は「来年もまた…」の思いが芽生えていた。

もちろん、次回は報告レポートなしで。

特集

社協、専門員に問われる「専門性」

社協事業が多岐にわたっている今日、社協、あるいは専門員にとっての「専門性」とは何か？あなたも一緒に考えてみませんか。

資格社会と専門性

直方市社協　高石　伸人

「いま、なぜ専門性議論か」という問いを念頭におきながら、与えられたテーマについて、「専門員」であることをいくらかは自覚しつつ、昨今の想いを述べてみたい。

まず、「社協の専門性」と「社協職員の専門性」とが、住民の眼からすればずれているかもしれないと思う。それは、私が入った頃は、実態はともかく社協イコール地域組織化活動の推進組織であったが、いまその業務は多岐に及んでいて、給食サービスやデイサービス、在宅介護支援センターまであって、そこには、保健婦や看護婦、栄養士、中には作業療法士まで、いわゆる「専門職」の人が社協職員として採用されている。

その種の職種の「専門性」というのは、自他共に認められた「専門的技術」のそれとして分かりやすい。しかし、ではその人達が「社協職員の専門性」を代表しているかといのは、誰しも「ちょっと違うんじゃない」と思うだろう。つまり、給食やデイは、社協じゃなくても特養や老健施設に委託されているケースもあって、社協でしかやれない事業ではないからだ。

言わば、「専売特許性」としての「専門性」こそが社協の、そして社協職員のアイデンティティに、存在感を与えるということになりそうである。

ところで、資格化現象との絡みで「専門性」を考えてみるのも、一つの切り口ではあって、少し長く社協に努めている職員なら、たとえば二〇年前と比べて社会福祉分野でも、多くの有資格者が採用されてきているという実感をお持ちであろう。

一九八七年の「社会福祉士および介護福祉士」の制定を引き立に、それらの有資格者が地域の施設や病院などに「その面」下げて出入りしていて、せいぜい社会福祉主事資格しか持たぬ社協職員としては、文字通り顔負けして小さくなってしまうということだってあるのかもしれない。

しかし、宇野裕氏も指摘するように社会福祉の「資格制度は福祉改革への社会という要請から、いわば行政的に作られたもの」（『月刊福祉』94・5）であり、一連の法改正に沿って、社会福祉のマンパワーの増員と資質の向上という必要に見合う形で資格化による「専門性」の強化が図られてきていると理解すべきであろう。

田川市にある福岡県立大学は、筑豊では、唯一の福祉系大学として、今日まで福祉現場にユニークな人材を送り込んできた学校ではある。先日久し振りに大学を尋ねて、ある先生と話をする中で、「このごろの学生は、資格取得に必要な受験科目以外の受講をあまりしない傾向があって、学生気質もずいぶん変わってきた」と言われる。これはまさに資格化が生み落としている現象の一つとして、考えさせられる例である。

佐々木賢氏によると、今日、いわゆる「資格」なるものは一二〇〇種類を越えていて、カタカナの横文字を駆使したものが多いという。たとえば、職安資料に「店員」とあるのを、就職情報誌では、「ハウスマヌカン」とか「ファッションアドバイザー」、「縫い子」は、「ソーイングスタッフ」、流行色の選定は「カラーリスト」、爪の手入れは「エスティシャン」、その他「テレホンアポインター」や「フロアーレディ」、「フィニッシュワーカー」など、それだけ聞いても何の仕事だか分からないような資格が増えている。要するにイメージチェンジ（アップ）には横文字が武器になり、イメチェンしたとたんに資格化するものがかなりあるのだ。私たちの間でも、専門員というようなダサイ名称じゃなく、コミュニティワーカーとかオーガナイザーなどと呼ばれれば、ちょっとした専門家の気分を味わえるという感覚がないだろうか。

先の宇野氏の指摘は、「必要は資格化の母」と言うことができようし、それは、国の要請であると同時に、この国の人々の「便利さ」や「快適さ」（生活の質の向上）や「安全性」などを求める精神に符合しているというようにも読み取れるだろう。つまり、資格は権威に結びついていて、より「便利で、快適で、安全な暮らし」を求める人々の身障が、資格を持った「専門性」の高い人を増やしていくということにもなる。

佐々木氏は、その著『怠学の研究』の中で、「①資格によって仕事を独占する。②資格は人間の序列化を図る。③資格は仕事の現場にセクショナリズムを持ち込む。④資格はそれのなかった頃の共同労働を破壊している」などを述べているが、私たちの職場の近未来図を予感させて、ハッとしないだろうか。

社協職員の「専門性」という時、私たちに求められるのは、吉澤英子氏の指摘する、「人権という視点」や「問題要因明確化の視点」などと共に、たとえば性格問題を抱える当事者に接するときの「感度」とでもいうべき資質がきわめて重要な要素になると思われる。

資質といえば生来のものと誤解を受けそうだが、他者への共感力（情力）や意欲、人間のしがらみに耐える力、腰の軽さ、立ち止まる勇気、経験、そして価値感や専門的知識などの集積として考えるべきであろう。

その意味では、社協の固有の役割や職員の「専門性」を問う場合、いたずらに専門職化に振り回されることなく、さまざまな社会矛盾を背負わされた人たちと歩みを共にし(問題を足場にし)、他市町村の社協職員とも研修や情報交換の機会を持って、具体的な活動事例に学びながら錬磨していくものだと思われる。そのような出会いの場として、職員の連絡会は目指されるべきではないだろうか。

社協自体の組織化について

八女市社協　中野　孝人

私は、昭和59年4月1日老人福祉センターの嘱託職員として八女市社会福祉協議会に就職しました。同期採用は水町芳博君、井上裕子さん、中島しげ美さんの4名で、当時の職員数は私たちを含めて10名でした。その後福祉会館事務局へ移動、現在、専門員と事務局長を兼任し職員数は、36名です。

これまでの11年間いつも頭のなかにあった「組織」について述べさせていただき、自分は社協を組織化出来たのか反省の場にしたいと思います。

社協という組織は共同体組織か機能体組織か

◆**共同体組織**（ゲゼルシャフト）は、構成員の満足が目的です。

家族、地域社会、趣味の会など、人の世の摂理によって自然発生的なつながりで生まれ、構成員の満足追求を目的とした組織であります。

従って、その組織の発展よりも、構成員それぞれが組織に属する目的（満足）を満たすことが重要になってきます。（社協はこれかな？）

◆**機能体組織**（ゲマインシャフト）は外的目的達成が目的です。

組織内部の構成員の満足や親交はあくまでも目的達成のための手段であって本来の目的は、利潤の追求や戦争での勝利や、一つのプロジェクトの完成など組織外の目的を達成することです。（官庁、軍隊、企業、政党、社協はこれかな？）

何が原因で社協は元気を無くして行くのか

（組織論理の頽廃）

◆**腐敗より恐ろしい頽廃**

論理には、腐敗と頽廃とがあります。腐敗とは、悪いと知りながらも悪辣な行為が横行する現象です。（○○の濫用や○○人事など）

これに対して論理の頽廃とは、何が悪いか分からなくなる現象です。

◆**情報の内部秘匿**

事業成果の過大評価と過大報告。

◆**総花主義**（集中の不能）

能力の均等分散が固定化し、集中が不可能になる。

◆**滅びの美学**

「どうせ私たちは○○だから、しかし、私は、生涯この事業をやり続けていくのだ！」という悲しい誇り。

企業の場合には、一旦事業が低迷し、他の企業よりも給与水準が低くなり出世が遅れだすと、協働の経済的受難に快感を感じはじめます。

◆**「予算不足、施設の不備、人材不足」を並べ立て組織の欠陥を隠す。**

ある会議で問題点を挙げてみると、大抵は、カネとヒトとモノの不備を並べて、組織的欠陥を述べる人はほとんどいません。

もともと機能組織は、効率を追求するのだから、費用対効果の比率が重要であります。従ってカネとヒトとモノは不足気味なのが当然なのです。

◆**機能体が共同体化すると…**

構成員が心地よく生活するためには、まず内部での競争が少ないほうがよいのです。それには、まず終身雇用を徹底し、次いで内部の出世競争を無くしていきます。

能力や実績による抜擢人事を行わず、一番わかりやすくかえがたい基準で栄転昇進を決めるのがベターになります。最もわかりやすい基準といえば、年齢又は所属時期であります。従って共同体化した組織では、年功序列人事が一般化するのは当然の摂理です。

組織は、組織を防衛する

◆**組織は目的に向かって進まないことがあります。**

組織とは、ある目的をもった集団です。組織が創られるときには、必ずそれを創る特定の目的が存在します。しかし、そうして創られた組織も、又組織としての特定の目的を持ちます。組織は、組織自体が目的を持つので、組織を創った人達が描いた夢（目的）を忠実に守るわけではありません。組織を創った場合こういう場面によくであります。

障害者の社会参加を目的に作られたボランティアグループ（組織）がボランティアと障害者と押し倒しながら自己増殖に努めた例は多い。

イベントをするたびに障害者をほったらかしにして、イベント優勢につき進む。組織は、組織を防衛し、組織を創った人を防衛しなくなる。〔これをボランティアのタコツボ化〕といいます。

フィクション

２０××年政権政党は、地方自治法の全面的改正法案を上程した。一般に新地方自治法案といわれるこの法案は、１９４７年から施行されてきた日本の地方自治の枠組みを大きく変更するものだ。

この法案で、都道府県はすべて廃止される。都道府県にかわって、全国を９つのブロックに分け総合地方庁が設けられることになる。

市町村は一応存続する。しかし、大合併が行われ全国に１０００程度の市町村が置かれることになるだろう。

市町村の仕事の多くは、民営化される。電話の契約と同じように、市民は例えばゴミの収取について複数の会社の中から適当なところと契約することになる。

昔、民間委託が大きな話題を呼んだことがあったが、ゴミの収集処理そのものが自治体の仕事ではなくなる予定だ。これは、一例にすぎない。これまで市町村が行ってきた仕事の多くが民営化される。

さすがに小中学校の完全民営化は取り止めになった。設置は自治体の責任とされるが、運営はそれぞれの学校の独立採算となる。

高校は、高等学校管理基金によって設置され、運営はやはり独立採算となる予定だ。既に、７年前に、国立大学は全て独立採算になっており、駅弁大学といわれた大学の中には入校となったところもある。

全国社会福祉協議会、都道府県社会福祉協議会、それに全国３２００市町村の社会福祉協議会は……

××××××××××××××××

考えてみれば、あれを創れこれを創れといっていた時代は良かった。

自分の懐だけでやっていかなくてはならないこれからは、大変だ。

〈連載〉社協サポーターに拍手喝采

市町村社協の理事や評議員といった立場で、社協事務局を支え、日夜奮闘いただいている方々にご登場願い、思いの丈を語ってもらう企画です。

第５回目は、「八女市にこの人あり」と言われる八女市議会議員の山下恭平さんです。

過激な中にも本音がチラリと見える山下さんの言葉に耳を傾けてみては？

あなたの福祉観に問いかけます。

山下恭平さんにインタビュー

質問１　山下さんが社協で活動されるようになったきっかけは。

私が障害者というのが一番のきっかけです。１９８２年から、八女むらまつりを市社協に援助してもらうように頼みに行ってからのつきあいです。それからは、ボランティア、職業訓練生、臨時職員、嘱託職員、理事と社協の出世魚ブリのようです。社協とのつながりは、ボラ連会長時代から、より深くなってきたと思いますが、それが全てのまちがいの始まりでした。…笑

質問２　八女のボランティア活動の現状を教えてください。

高校生の組織化をおこなっています。また、八女ボラ連の会員は現在３００名で、市外の人もありとあらゆる人が参加しています。会費１００円を払っ

たち永久会員ですので、一度接触があった人は、スッポンのように話しません。このような八女ボラ連に対する個人のかかわりから、介護者の確保につながっています。これを私は、サポーターハンティングと呼んでいます。

質問3　社協とボランティアセンターの関係をどう考えられますか。

ボランティアセンターは、社協の除湿機、もしくは日本道路製作会社と思います。その心は、社協のゴミを取り除いたり、ボランティアが新しい道を作っていくものだと思います。やはり福祉では社協が主体であり、ボランティアセンターは主体にはなれないのです。そして、これからのボランティアセンターは、在宅障害者の支援、福祉資源開発、福祉人材の養成所とならないといけない。そのうちボランティアセンターの中から、ヘルパーさんが発生してくると思います。社協とボランティアセンターは、車の両輪で、病院や土日の対応など行政や社協ができない活動ができるのです。そのことが、社協を変え期間委任事務から団体委任事務となっていくのです。COというと社協マンはコミュニティオーガニゼーションと思いがちですが、私は、一酸化炭素中毒に社協マンがなっているのではと思います。

質問4　社協が事業型化していくなかで、公的介護保険でも高齢者中心となっています。障害者という立場でどう考えられますか。

障害者にしても、高齢者にしても、介護に異質性はないのです。しかし、障害者が介護保険で区別されることは歓迎することかもしれません。障害者は障害者のための施策が作りたいのです。障害者を意識して欲しいと思います。

この介護保険では、判定を行政がするようですが、不自由の専門家である私たち障害者にまかせてもたいたいと思います。判定が一番問題になると考えています。

質問5　山下さんが議員になられて八女市が変わったところ、変えたいところを教えてください。

私が議員になって、議員のなかで車椅子介護ができるようになった人が3人。尿器をすすいでくれる人が4人です。こんなに変わりました。一番変わったのは、当事者の意見が反映されるようになったことです。一番の例が、ガイドヘルパーの導入です。

それと議員さん自身が介護の体験ができる。しかし、課題が多すぎて私が議員を100年しても変わらないでしょう。それでも意識して議員さんに介護を頼むようにしています。

質問6　県内の悩める社協マンに一言お願いします。

社協は行政に対するコンプレックスがあると思います。社協に自治権がないのが問題です。社協マンは、社協に頼って来る人達のことばを行政に伝える代弁者です。いわば被告に対する弁護士のようなものです。行政は、住民の声は、無視できないし一番怖いのです。社協は福祉のプロで、行政よりも福祉にくわしいはずです。その意識をもつこと、自信をもつこと。そのことは経理をしている人でも同じことで、住民からみれば、社協の人は福祉のことは何でも知っている人なのです。福祉の専門家になることで行政の出向も減るのではないでしょうか。社協は行政もどきじゃなくて、民間であるべきなのです。現在悩んでいるあなた。あなたのまわりには、様々な活動を頑張っている人がいます。そして困っている人も。悩んでいるひまはない。「悩んだらは」ないのです。障害者を知れ。仲間は社協だけじゃない。明るい未来のために頑張ってください。

フリー○○○○○○。トーク

「あいだがら」

須恵町社協　岐部　健一

毎年のことですが、私の4月から11月までのほとんどの日曜日は、野球SUNDAYとなってしまいます。

小学生の頃から少年野球をはじめ、高校野球を終了するまで野球一筋だったせいもあるのでしょうが、頼まれると断われない性格も手伝って現在は4チームに顔をつっこんでいます。

おかげさまで、いろんな方と知り合いになれました。工務店の専務さん、瓦屋さん、中古車屋の社長さん、電気屋さん、葬儀屋の息子、飲屋のマスター、プールの監視員、看護士等々。年齢や職業は違っても一旦ユニホームを着てグランドに出れば先輩、後輩はありません。

私はキャッチャーですが、キャッチャーは位置的に試合中にあっちこっちに指示を出さなくてはいけないポジシ

ョンなんです。これがキャッチャーの大変さでもあり役得な面でもあるんです。

指示をする時は、もちろん敬語なんかつかいません。仕事上、頭も下げてお願いすることが多い中、この時、とばかりにストレスを発散させます。外野からの返球がそれて相手の得点にでもなろうものなら、「しっかりかえさんか」ぐらいは当り前で、「なんばしようとや」「どこにかえしようとや」等と文句ともとれる指示を出すわけですが誰一人として不愉快な顔をする人はいません。

それは、たとえ草野球であっても勝つ目的は皆同じ？であり、勝つためにはミスを少なく、締まった試合をしなければ勝てないということを皆知っているからなんでしょうが、そうは言っても草野球にエラーはつきもの、珍プレーの連続です。そこで私のストレス発散の場が台本通りにセッティングされるわけです。

試合が終って勝っても負けても、反省会という名の「飲み会」があります。

私はほとんど飲めないのですが、必ず出席して言いたいことをいうようにしています。

《ある試合の反省会から：》

「○○さんは、一番大事な場面で大きなエラーをし、チームを負けに導きました。(笑)しかし、キャッチャーである私のストレス発散の場を毎試合必ずセッティングしていただく○○さんの優しさには、深く感謝しています。(笑)

相手を思いやる気持ち、尊重する姿勢は、福祉関係に従事する私にとって大変勉強になります。」(大笑)

最後に、野球を通じて知り合いになった方々との「あいだがら」を大切にし草野球を今後も続けていきたいと思います。当分の間、私のストレス発散の場はなくなりそうにありません。あーよかった。

仁義なき戦い

田主丸町社協　林田　稔男

「今日は寒かねえ。」この言葉が聞こえる頃になると思い出す一人の老婆。八十代のこの老人は、一人暮らし。畳一枚ひかれていない部屋には、布団替わりの四枚の座布団と尿を入れるバケツがあるだけ。家の中には雪が降る日は雪が舞い込み、風の吹く日は木枯らしにのって枯れ葉が舞い込む。使われていない五右衛門風呂には枯れ葉が半分以上も降り積もっている。半身に麻痺の残る体で作る食事も白御飯にイリコをのせただけの粗末なもので、それをへこみだらけの鉄製の器に入れて食べる。もちろん入浴など、ここ数年行っていないとのこと。暖をとる道具というと、小さな火鉢式のこたつに、薄っぺらの毛布一枚のせただけ。

十五年前、社協へ就職して間もない頃の福祉の現状である。特老ホームの建設ラッシュの時代である。ヘルパーの訪問が開始されたものの、この老人の現状をみて、在宅なんて考えられない、病院なんてかかったこともないし、入院なんてもってのほかのこの老人、開始早々の施設を利用しての我が町の入浴サービス。これしかない、入浴を勧めよう。結論に達した弱小社協の新米社協マンは、何度も訪問を繰り返し、やっとのことで、「行ってみろかの。」の言葉を得られた。

「ばあちゃん寒かねえ、ぬうくかお風呂に入ろうか、お風呂入ったら帰って来ればよかけんね、またつれて帰ってくるけん。ね、ね……。」

ふと見ると、老人の頬に一筋の光るものが。あんたにゃ負けたばい、とでも言いたげに、うつろな目を私に向けにこっと笑ったあの笑顔。

それっきり、この老人は施設の人となった。数ヶ月後、その施設を訪れた私は、春の陽光につつまれたテラスで車イスに乗った老人と再会した。私の顔をじっと見ている。心なしか赤みの増した頬は、光を映しピカピカに光っている。「ばあちゃんどげんね。ここは良かろ。」と尋ねた私に返ってきた言葉は、「ほんに良か、ぬうくなって天国に来たごたる。」

それから、一ヶ月程して訃報が届く。

最近、〝終末ケア〟なる言葉をよく耳にするようになった。この四月に久々に社協事務局へ戻ってきた私、数ヶ月経ったある日、民生委員と役場の担当係長が社協へこられ、これこれこういう理由で退院されて、在宅になられるのでヘルパーさんをお願いします、とのこと。六十代後半のこの男性、胃がん、それも末期がん患者であるとの情報。この時初めてこの言葉を聞き及んだのだが。便とゴミまみれ、食事も満足に取らないこの男性、一ヶ月程の一人暮らしの在宅生活の後、再入院。自分で歩けない程に弱った男性を病院へ送る車中、民生委員や行政、ヘルパーに対する苦言ばかり、降り際にもらした言葉が「地獄のごたった、ほんなこつ。」間もなく訃報が届く。

在宅にも限界がある。対象者の最後の言葉が処置の良否を物語っているような気がしてならない。福祉は変わった、実感する毎日である。

うちの常連さん

立花町社協　中村　哲也

社協業務にこだわらず、つらつら考えていることを書くようにということだが、いざ書こうとすると何もうかんでこない。

終わり。というわけにもいかないので、事務所がある老人憩いの家に来ている常連さんのことについて書きたいと思う。

多分、憩いの家が出来た当初から来ているであろうおじいさんがいる。事務所内では通称「赤じいさん」と呼ん

でいる、この正月で満一〇二歳になったおじいさんだ。

赤い帽子に赤い服、今は赤いマフラーを首に巻き毎日憩いの家に遊びに来ている。それも一キロはある自分の家から歩いてである。さすがに最近は家族の方も近くまで見送りに来てあるがまだまだ足どりも軽く、スタスタ歩いている。いっしょに歩いたら負けるかもしれない。

この赤じいさんは、ゲートボールが好きである。他の常連さん達とチームを組んで、楽しそうにやっている。ただ、ちょっと耳が遠いので、同じチームの人から「こっちに打って。」とか、「そっちに打ったらいかん。」とか言われても全然分からない。自分の打ちたいようにポンポン打っている。それでよく怒られているが、聞こえないから平気なのか本当に楽しそうだ。

また、テレビを見るのも好きらしい。朝、憩いの家に来るとテレビの前に自分の椅子をもってきて、すぐにスイッチをひねっている。他のお客さんが見たい番組があってもなかなかチャンネルはゆずらない。なにしろ、このテレビは赤じいさんが憩いの家に寄付したもので、自分のテレビと思っているわけではないのだろうがガンコである。今はイヤホンをつけてみているが、以前は映画館のような大音量で見ていたので、事務所までうるさかった。

こういう感じで、憩いの家で一日すごしているわけだが、一番すごいと思うのは、病気にならないことだ。私が社協に勤めて七年程たつが、その間、カゼひとつひいていないのではないだろうか。

人生八〇年といわれるが、このおじいさんを見ていると人生一〇〇年といわれる日がそう遠くはないと思えてしまう、そんな「赤じいさん」だ。

こどもたちからの警鐘

新吉富村社協　沼野　淑子

「私は傷をもっている。でもその傷のところからあなたのやさしさがしみてくる。」

部屋に下げたカレンダー。うす黄色の可憐な花のスケッチに小さく添えられた片すみの詩。毎日々々、日々の私をなぐさめて明日への勇気をくれる。いらだつ心を静めて、やさしい気持ちにしてくれる。

星野富弘さんのことを知ったのは、もうずい分前のことになるけれど、あの出会った（実際にはまだ一度もお目にかかったことはないのだけれど）時の、何とも言いようのない感動はいつまでも心に残っている。星野富弘さんのことばや詩から、星野さんの確かな「いのち」がやさしく、厳しく、私に問いかけ語りかけてくれる。

生きることへの挫折と絶望。その淵から愛を知り、生かされている「いのち」を知る。星野さんの確かな「いのち」の息づきが伝わってくる。

○

最近、続けてまた二人の中学生が自らの命を絶って遠いところへ旅立っていった。同じ世代のこどもの親としてもこの現実はたまらない。無念さと後悔と自責の念に一生縛られても、愛する我が子はとり戻せない現実……。

十代の限りない未来が約束されているはずのこどもたち。その死に様は、あまりに切なくて痛ましい。

「生きていることが、ほんとにつらかったんだろう。」

「死ぬことで自分を楽にしたかったんだろう。」

たった十何年かしか生きてない人生、人生と呼ぶにはあまりにも短すぎる時間の中でそんなに深い絶望を味わってしまったなんで……。みんな、私たち大人の社会の責任なんだ。

「ほんとうにごめんね。」

○

世間やマスコミが、今の日本は戦争もなくて平和で幸せだなんてよく言ってるけど、ほんとにそう言えるんだろうか。いじめや差別があって、こどもたちが絶望している社会のどこが平和って言えるんだろう。

この前、長崎に住んでおられる松尾敏さんが、こちらの方までお話をしに来られた折、「いのちが平等に扱われて真の平和といえる。」という内容のことを言われた。このことばを真摯に受けとめたい。今、こどもたちの鳴らす警鐘に耳を傾けて、大人たち自らが社会のあり様の非を問い直さなければ、この社会全体変わってゆくはずがない。

と、言いながらどこか自分も虚しくなってやりきれない。もっと正直に言ってしまえば自分の無力さを恥じている。

○

我が子を含めてこどもたちに知ってもらいたい。生かされているいのちの尊さといのちを愛すること。同じ様に自分のいのちも愛され、かけがえのない尊いものだということを。

○

二月、三月、四月になって、れんげの花が風にゆれる頃、星野富弘さんが大分市に来られるらしい。四月九日～二十一日に大分県立芸術会館で、「花の詩画展」が開かれる。その初日だけお会いできるかもしれないと聞いた。

多分、何も話せないで遠くから見てるだけに終りそうだが、とても楽しみにして待っている。

志摩町社協　加藤　博貴

○経験年数　六ヵ月
○特技趣味　パチンコ・プレイステーション・読書(マンガ)・陶芸・釣り
○セールスポイント　笑顔（カックイイ・シャイなのであまり見せないが見た人は幸福者）
○メッセージ
まだまだ右も左も分かりません（社協内で方向○ンチと言われている）。競艇で言えば、予選に六人には入りましたが、コース取りできずに六枠から出おくれ状態です。（トーシロってこと、期待してくれる人から罵声がとぶ）
あえて諸先輩の皆様にメッセージすることは、ドラフト外で入ってきましたので、いつ戦力外通知を出されるか毎日ビクビクしていますのでよろくかわいがって下さい。（特定の人には言ってません）ところでパチンコ負けっぱなし連続挑戦中を止めてくれる方どなたかいませんか？

香春町社協　井上　誠

○経験年数　二年六ヵ月
○特技趣味　バスケットボール
○セールスポイント　明るい
○メッセージ
平成五年八月に香春町社協に入り福祉活動専門員として従事してきましたが、二年が過ぎた今、毎日の業務の中で専門員としての役割を十分に果しているか又、町民のニーズに対し一つでも多く応えられるよう努力しているか反省の毎日です。
香春町社協は香春町地域福祉センター「香泉荘」に事務所を置き、町の委託を受けデイ・サービス事業を実施していますが私自身、学生時代に福祉の勉強をしたわけではないので、毎日が初めての経験でした。
お年寄りとの出会いは大変貴重な事で、学校では教えない多くの事を学べ日常生活当で役立つ事がありました。今後も高齢者を介護すると言う理念ではなく、互いを必要とする生活を確立していきたいと思います。
専門員として分からない事が多く皆様方にお世話になると思いますが宜しくお願いします。

金田町社協　柳沢　敏彦

○経験年数　五カ月
○特技趣味　映画鑑賞、バイクにも時々、時間を見つけて乗っています。
○メッセージ
私は、金田町社協に福祉活動専門員として入りました柳沢俊彦といいます。社協に入る前は、施設で介護職員、相談指導員としてお年寄りの方々のお世話をさせて頂いていました。
社協で働くようになって五カ月程経ちますが、日々の業務に追われているというのが現状です。
そんな中、職場の上司、先輩方の暖かい御指導を受けながら、色々なことを勉強しているところです。
「福祉」とは、全ての人々が、幸せになるためのお手伝いをする仕事ではないかと思っています。
私一人では微力で何も出来ませんが、色々な方々の御指導、御協力を賜りながら、少しでも皆様のお役に立てるよう頑張っていきたいと思っておりますので、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

編集委員からひとこと

まなこ編集委員のお役もあと一年。早く読むだけの専門員に戻りたい。
楽子

今、私の一番の楽しみは二人の息子と一緒に風呂に入ることと…つづく。㊟
私は福祉センター諸君ではなく社協マンでありたい。　久留米社協　古賀
明日から一泊で宮崎へGO！どーか雪など降りませんよーに!!　（誠）
人の現行を読んで、「自分の日常生活を改めよう」といつも思ってしまう自分が悲しい。　㊟
紅一点、専門員の専門性、社協とはと振りかえる楽しい時間でした。M・M
専門員になって二年目で初めての編集委員。教わることが多いです。（和）
現行を依頼して心よく引き受けて下さった方々、ありがとうございます。
今度、編集委員になっても私には、原稿を回さないで。　白石英治